小児尿路感染症の臨床的研究

新潟県立吉田病院小児科　吉住　昭
高田悟郎　谷沢隆邦
常山佐世子　柳原俊雄

I. 培　養

第1回班会議において示された尿培養上の条件にしたがって培養を行った。つまり早期第1回尿の中間尿を採尿し，直ちに 4°C の冷蔵庫に保管し，できるだけ速やかに培養した。

（表1）11月は112例中5例，4.4%。12月は113例中7例，6.1%，計12例，5.3%に 10^5/ml 以上の菌数を検出した。

（表2）この陽性12例についてみると尿所見に乏しく，蛋白尿4例，尿中白血球増加2例，発熱1例で，他はいずれも無症候性であった。原疾患への影響は，ネフローゼの再発が1例認められた他は特別のものはなかった。ステロイド内服との関係は，この12例に関する限り一定の傾向はなかった。

（表3）ステロイド内服との関係を更に追求するため，4群に分けて連日3日培養を行った。しかし，ここにおいてもステロイドを多量に内服する群に陽性例が多いということはなく，3日のうち1日だけ 10^5/ml を示して

表 1　尿路奇形及び尿路感染症以外の腎疾患
定期的，中間尿培養
（早朝第1尿直ちに 4°C 保存）

時期	培養例数	菌数 10^5/ml 以上の例数%	菌種	
1977年 11月	112	5 (4.4)	Proteus	4
12月	113	7 (6.1)	E. coli	3
			Pseudomonas	2
			Staphylococcus	2
計	225	12 (5.3)	Klebsiella	1

表 2　陽性12例について

1. 尿所見		
蛋白尿	卅～廿	2
	＋	2
	－	8
白血球	多数	2
	0～3	10
2. 臨床症状		
	あり	1（発熱）
	なし	11
3. 原疾患への影響		
	あり	1（ネフローゼ再発）
	なし	11
4. ステロイド内服		
40 mg/m²	隔日	2
	3投—4休	3
減量過程の3投4休		3
	内服なし	4

表 3　連日3日早朝第一尿培養

	例数	菌数 10^5/ml 以上例数
1. Pred. 60～40 mg/m² 連日群	6	0
2. Pred. 40 mg/m² 隔日群	6	1（1日のみ）
3. Pred. 3投4休群	7	1（1日のみ）
4. 対照　喘息児群	8	1（2日間）

表 4

1977. 1～12月　於・小児科外来

尿培養施行例数　374例
菌数 10^5/ml 以上例数　48例
菌数 10^5/ml 以上年間実数 41名
（1名—1カ月—1例）（12.8%）

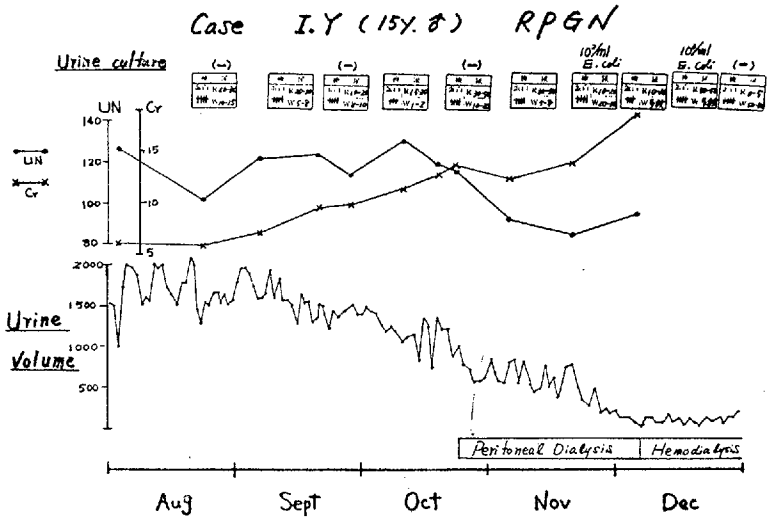
年令	例数	性別 男	性別 女	尿所見 (＋)	尿所見 (－)	臨床症状 発熱	臨床症状 腹痛	臨床症状 泌尿器	臨床症状 その他	再発 ＋	再発 －	I.V.P 施行	I.V.P 異常	I.V.P 正常	V.U.R 施行	V.U.R ＋	V.U.R －
0	4	3	1	4		4			1	3	1						
1	7	5	2	1	6	7			5	1	6						
2	5	3	1	1	4	4	1	1	2	2	3	1	1H				
3	2	2		1	1	2	2	1	1		2						
4	6	3	3	3	3	4	5	3	5	2	4	2	1H	1	2	1	1
5	3	1	2	3		2	2	1	1		3						
6	3	2	1	2	1	1	2	1	2	1	2	1	1H				
7	3	2	1	1	2	3	1	1	1		2	1		1			
8																	
9	3	2	1	2	1	3	2		2	2	1	2	1H	1	1	1	
10																	
11	2	1	1	2		1	1			1	1	1	1H				
12	2		2	2		1			1	2	1	1	1H		2	1	1
13	1		1	2		1			1	1							
計	41	25	16	23	18	33	16	8	22	15	26	9	6	3	5	3	2
%		61	39	56	44	80	39	19	53	37	63						

注）H—水腎症

表 5

No.	年令・性	透析歴（月）	乏尿に至るまでの期間(月)	乏尿時期の1カ月平均尿量(ml)	乏尿時期の尿所見（×400）					原疾患
					尿培養	蛋白	赤血球	白血球	上皮	
1	17♀	47	6	360	(−)	卌	0〜1	1〜2	0〜1	慢性糸球体腎炎
2	14♂	23	3	2	(−)	卅	0〜1	200<	10〜20	紫斑病性腎炎
3	14♀	11	6	178	10^3/ml E. coli	卌	5〜6	30〜40	3〜4	先天性尿路奇形
4	15♂	9	3	182	(−)	卌	10〜15	50〜80	5〜8	ネフローゼ症候群
5	15♂	2	1	99	10^3/ml E. coli	卌	10〜20	200<	10〜15	RPGN

表 6



も，他の2日は 10^4〜10^3/ml 以下で，対照群に2日陽性例があった。いずれも無治療の状態である。

（表4）外来患者では先の条件を充たさないが臨床的に尿路感染症を疑い尿培養を行ったものが，昭和52年1年間に374例あり，うち 10^5/ml 以上の菌数を示したものが48例12.8％であった。5才以下の幼児に多く，採尿パックによって取った0才児で4例中4例が尿所見あり，再発反復が4例中3例に認められ，採尿パック尿の診断的価値を示唆している。臨床症候は発熱が80％と高く，泌尿器症状を訴えるものは19％であった。前後に再発くり返しをおこしているもの37％，I.V.P.は9例中6例に水腎症を認め，V.U.R.は5例中3例に認められた。

II. 血液透析患児の尿中白血球について

（表5）5名の血液透析患児の初回透析より乏尿に至るまでの期間，尿量ならびに乏尿時期の尿所見をみたものであるが，有意の細菌尿を認めないにもかかわらず尿中白血球の多いことがうかがわれる。この傾向は尿量の減少の程度に比例するようである。

（表6）一例を呈示する。この尿中白血球の由来につき血液透析という異常状態にあるものの，液性・細胞性免疫能，V.U.R.の有無，尿中細胞成分の分析などこれから検討されなければならないと思う。

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

Ⅰ.培養

第1回班会議において示された尿培養上の条件にしたがって培養を行った。つまり早期第1回尿の中間尿を採尿し,直ちに4℃の冷蔵庫に保管し,できるだけ速やかに培養した。

(表1)11月は112例中5例,4.4%。12月は113例中7例,6.1%,計12例,5.3%に105/ml以上の菌数を検出した。

(表2)この陽性12例についてみると尿所見に乏しく,蛋白尿4例,尿中白血球増加2例,発熱1例で,他はいずれも無症候性であった。原疾患への影響は,ネフローゼの再発が1例認められた他は特別のものはなかった。ステロイド内服との関係は,この12例に関する限り一定の傾向はなかった。